

つくり
育てる漁業
人と技術の
ネットワーク

ACN REPORT

NO.24 2006.JAN.
AQUA CULTURE NETWORK

特定
非営利
活動法人

ACNレポート 第24号

2006年1月27日発行

(毎年2回1月・8月発行)

編集／NPO法人ACN事務局
発行人／田嶋猛(NPO法人ACN代表)
発行所／NPO法人アクアカルチャーネットワーク
〒833-0056 福岡県筑後市久富1343番地
ACN事務局／クロレラ工業株式会社
生産本部 技術特販部内
TEL 0942-52-1261
FAX 0942-51-7203

1.2006年 新年挨拶

NPO法人 ACN 代表 田嶋 猛

2.種苗生産中間速報

ヒラメ・マダイ・トラフグ・シマアジ・その他(中国スズキ)

3.2005年の輸入稚魚・中間魚導入状況(中国)

カンパチ・スズキ・ヒラマサ・トラフグ

4.養殖概況

マダイ・カンパチ・ハマチ・ヒラメ

5.魚病対策

株式会社サン・ダイコー水産事業部

6.ACNトピック

「西日本トラフグ陸上養殖協議会」が発足・アユ養殖再生への試練

7.海外情報

太平洋貿易株式会社 浅田雅博

8.新商品紹介

クロレラ工業株式会社 有限会社ISC

9.新入会案内

中部飼料株式会社

10.新年挨拶

ACNメンバー紹介

2006年 新年のご挨拶

あけましておめでとうございます。平素からACN
レポートをご支持いただきありがとうございます。
本年もよろしくお願ひいたします。

NPO法人 ACN代表 田嶋 猛



昨年の忘年会シーズンに入った11月末と12月初めに韓国ソウル市と台湾高雄市で結婚披露宴に出席する機会があったのでかいつまんで紹介いたします。

先ず気になるお祝いの金額ですが韓国では100,000 won (11,000円)、台湾では10,000NT\$ (33,000円)を用意しました。別途各々20,000円程度の記念品を日本から持参しました。日本での披露宴のような宴席は韓国では特段無く、出席者に食事券が配られ結婚式の後で併設のレストランで三々五々食事して散会、これに対して、台湾ではホテルにて第一日目新郎側宴席に300人、第二日目は新婦側の宴席で900名の大宴会となりました。料理のほうも前菜に続き、フカヒレスープから始める中華のフルコースでした。韓国、台湾とも引き出物は無く、韓国ではキリスト教式の結婚式の後で新郎新婦が民族衣装を着て男性側の親族だけに新婦を紹介するという男性優位の儀

式がありました。台湾では結婚式は1ヶ月以上前に終わっておりどのようなスタイルであったか不明でした。以上の様子から読者の皆様は察しがつかれたかと思いますが韓国的新郎の父(私の友人)は結婚式だけのために日本の友人を招くには申し訳ないと思われたようでその夜は多忙にもかかわらず日本料理店で忘年会をかねて我々日本からの客のために一席設けることになりました。

官官接待を始め企業の交際費の減少が水産養殖業界の沈滞の一因といわれて久しく感じますが今回の台湾での900人(90卓×10人/卓)でのフルコースはある意味壯観で中国(台湾)人の底力を見せ付けられたような気がすると同時にアルコールの力もあったと思いますが日本でも豪快に宴会を行い、業界発展の起爆剤になりたいものだとついつい気が大きくなってしまいました。

年 次	ギンザケ	ブリ類	マアジ	シマアジ	マダイ	ヒラメ	フグ類	その他	魚類計
H11 (1999)	11,148	140,411	3,052	2,935	87,232	7,215	5,100	7,344	264,436
H12 (2000)	13,107	136,834	3,052	3,058	82,183	7,075	4,733	8,631	258,673
H13 (2001)	11,616	153,075	3,308	3,396	71,996	6,638	5,769	7,991	263,791
H14 (2002)	8,000	162,000	3,000	3,000	72,000	6,000	5,000	8,000	268,000
H15 (2003)	9,000	152,000	4,000	3,000	82,000	6,000	5,000	8,000	272,000
H16 (2004)	9,607	150,068	2,458	2,668	80,959	5,241	4,329	6,951	262,280

■海面養殖業 魚種別収穫量

(農林水産省HP 統計データ)

単位：トン

備考：ブリ類 ブリ (99,791)
カンパチ (46,975)
その他 (3,302)

1. ヒラメ

平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目

年内（2005年9月～12月）の種苗出荷尾数は、一昨年（2004年）同期間の250万尾を下回ったとみられる。九州地区での出荷尾数が減少したことが要因となっている。出荷尾数減少の要因は、黒化・白化・ウイルス疾病・奇形など様々であった。

ヒラメの国内消費は長期的には減少傾向にあること、韓国からはコンスタントな輸入が続いていること、国内のヒラメ養殖の不調、成長の遅れなどの要因で、

養殖タンクが空かず結果として年内の稚魚導入数量は減少したと思われる。

稚魚出荷サイズは昨年同様7cm UPが主流で、浜値80～85円／尾（運賃・税別）であったが、10cm UPの稚魚も出荷された。年明けの出荷は、ボイラー用燃料価格の高騰を受けて昨年同様の価格で販売される模様。

2. マダイ

真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

昨年（2005年）秋導入予定であった越夏分について、特にイリドウイルス症の被害もなく順調に飼育できていたものの、四国エリア養殖業者の生産意欲低下の影響で荷動きは悪く、導入尾数は例年より少ない模様で、バイオ愛媛・吉川水産・近大など計350～400万尾程度の出荷尾数と予想される。（生産業者も予約・注文分しか生産していないことだが・・・。一部地区では秋口に白点病が発生して、出荷に影響の出た業者もあった。）

今期の生産状況として、山崎技研が最も早いペースで生産しており、既に2ラウンド目に入っている。また、販売についても1ラウンド目を近日中に出荷予定。バイオ愛媛・吉川水産・近大などは春先出荷用として9、10月から生産を開始しており、既に沖だし中で、2ラウンド目は年明けに生産開始予定。一方、ヨンキュウでは生産時期を遅らせており、12月からの生産になっている。

3. トラフグ

虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

一昨年（2004年）に続き年内出荷無し、年明け1月出荷分も低迷。

年内（2005年10月～12月）の種苗生産業者は（株）長崎種苗をはじめ10社であった。その内1社は生産を中止、実質9社。昨年（2005年）末までの出荷は一昨年に引き続きゼロ、年明けの出荷予定尾数は約30万尾で2004年の55%前後にとどまると思われる。

早期出荷種苗（12月～1月）の海面養殖分は、10月下旬～12月出荷で約800gサイズで中国産・蓄養物とバッテングし、荷動きが悪い上に単価も2,000円/kgを大きく下回る結果となった。今期種苗は中国産とバッテングを避ける意味もあって、早期物は低迷し、4

月～6月出荷分に集中すると思われる。

2005年にトラフグ陸上循環養殖施設が数社、稼働したもののが1年1回転（出荷）のローテーションは未達成で、昨シーズンの種苗販売拡大にはつながらなかった。

早期種苗価格は昨年並み、7cm Upで浜値105円～110円（歯切り+10円）で販売される模様。今後、中国産に太刀打ちできるのは10月時点で1.1kg/尾Up、安全、肉質良好、白子持ちが必須要素となると思われる。

4. シマアジ

近畿大学、山崎技研、ノグチフカが昨年11月からマリンパレスは年明けからの種苗生産だが予約・注文は激減しており「販売確実な数量以外は生産しない」(株)山崎技研 山崎専務)など今期の種苗生産量

は激減することが予想される。別途相当数の中間魚（昨年種苗生産分）在庫がありその動向が注目されるところである。

5. その他 中国スズキ

昨年1000円/kgまで上昇した中国スズキ(大陸スズキ)の種苗生産が10年ぶりに注目されており国内唯一の受精卵供給元であるカネト水産に注文が殺到している。種苗生産は昨年末にカネト水産ほか1社が開

始しており年明けからは更に4社が予定している。昨年秋には中国から中間魚(18cm、230~250円/尾)が約100万尾輸入されており主として愛媛県で養殖されている。

2005年の輸入稚魚・中間魚導入状況

■ カンパチ（中国）

稚魚、中間魚導入尾数は、1,200～1,300万尾。一年比6～7割前後とかなり減少している。

■ スズキ（中国）

導入尾数は、200～250万尾。一昨年より多い導入となっている。入荷後の状態悪く、最終尾数は減少すると思われる。

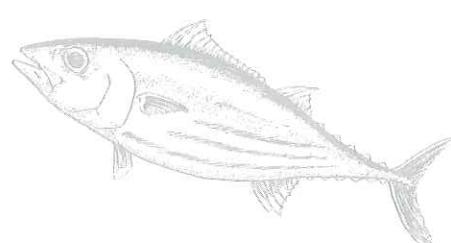
■ ヒラマサ（中国）

導入尾数は、40～50万尾。一昨年に比べ1～2割減少。

■ トランクス（中国）

300g程度の中間魚の導入はほとんどなかった模様である。

成魚は800gアップが主流で、活魚で100万尾輸入され一部では中国側がリスクを持つ委託販売もあったようである。国産浜値キロ物2000円/kgのとき中国産は1800円/kgと価格差は少なくなってきた。



養殖概況

1. マダイ

真鯛 真鯛

今期（2005年）は一昨年（2004年）までの価格低迷期（500円/kg台：浜値）を過ぎ、600円/kg台で推移していたことから、ようやく明るい兆しが見え始めたと期待していたが、12月になってからは再び560～580円/kg前後（サイズ問わず。四国地区）の価格まで下がってきてている。近畿地区でも2kg/尾までが630円/kg、2kg/尾アップが600円/kgとなっており、下げ傾向。愛媛・高知や三重など主産地では今期導入

尾数は減少しているが、なかなか相場に反映されていない状況。疾病発生状況として、慢性化しているエドワジエラ症とイリドウイルス症が挙げられる。イリドに関しては大きな被害は出ておらず、エドワジエラ症に関しては、業者によっては大きな被害が出ているものの、決定的な対処法はなく、成長や効率及び品質の足を引っ張る要因となっている。

2. カンパチ

寛八 寛八

一昨年（2004年）発生した中国産中間魚のアニサキスの問題で、昨年秋口は大幅に中間魚の導入が減少した模様。一部、業者では国産の中間魚（春先導入分）を導入している業者もある。また、中間魚減少の影響か、大分などで中国産ヒラゴ（ヒラマサ中間魚）の導入も多いとのこと。成魚の相場は700～730円/kg（浜値）で推移しており、相変わらずの低空飛

行が続いている。在池状況として、当歳魚は2004年より30%前後少ない情勢で1,200万尾程度、2才魚はやや少ない1,000万尾程度となっている。疾病発生状況としては主産地である鹿児島で夏場の新型連鎖が大きな被害をもたらした。この原因菌には現行ワクチンの効果がなく抗生物質で対処するしかない状況。新型連鎖対応のワクチン開発が急務と思われる。

3. ハマチ

飯鮒 鮎鮒 鮎鮒

昨年末の養殖ハマチ相場は500円/kg前後と生産原価を下回る厳しい状況であったが、全国の1世帯あたり養殖ブリ購入金額、数量共に前年より増加しており（総務省調べ10月）、出荷は好調であった。

今年度は、長引く赤潮の影響で1ヶ月以上給餌出来なかつたため、前年度に比べると若干サイズは小

さい地区もある。

魚病については、年末の急激な冷え込みによる黄疸などが確認されている。

ハマチ相場に影響を与えるカンパチの動向も気になるが、サケの消費拡大からも目が離せない。

4. ヒラメ

平目 平目

昨年末の養殖ヒラメ相場は、キロ物で1,400～1,500円/kg、500gサイズが1,200円/kg前後で推移した。韓国産養殖ヒラメが1,100～1,200円/kgで数多く入ってきている様で、国内の養殖ヒラメの動きが鈍くなつた感がある。そのため、養殖業者の池が空かず、年

内の稚魚導入にも影響を与えた。

昨今、景気が回復しつつあるとの話を耳にするようになった。これに伴い、高級魚といわれるトラフグやヒラメの需要が増えることを期待したい。

魚病対策

β溶血性レンサ球菌症不活化ワクチンについて

(株)サン・ダイコー水産事業部 藤原和宏

前号にもご案内させていただきましたが、昨年からヒラメのβ溶血性レンサ球菌症不活化ワクチン(Mバッカイニエ、川崎三鷹製薬)が発売されました。今回は、その評価及び効果と、今回のワクチン接種に関わる様々な状況についてレポートさせて頂きます。

—ワクチン効果について—

βレンサワクチンの評価、効果について昨年調査(大分11軒、愛媛3軒、鹿児島2軒)を行ったところ、アンケートを行った生産者全員の方々から、βレンサ球菌の発生を抑えられたとの回答を頂きました。ただし、対象区(未接種区)を設けた比較試験において、対象区ともに区連鎖の発生がなかったとの回答も含まれております。

—ワクチンが効いてない?—

βレンサワクチンを接種した生産者の中で、ワクチン接種後、今までのレンサと同様な症状による斃死が発生したとの事例がありました。当初、このワクチンの効果に対し、疑問も抱かれましたが、大分県農林水産研究センター水産試験場、長崎大学で詳しく菌を調べて頂いたところ、これまでと違う種のレンサ球菌であることがわかりました(*Streptococcus parauberis*:ストレプトコッカス パラウベリス)。

ご存知のように、ワクチンというのは特異的であるため、βレンサワクチンでは、この新しいレンサ球菌に効果はありません。

—βレンサ以外の病勢が強くなった?—

また、βレンサワクチンを接種したことによって、エドワジエラ タルダ(以下、タルダ)症、滑走細菌症による斃死、ならびに病勢が強くなったとの意見もありました。

一つの病気を抑えると、別の病気、もしくは、また新しい病気が出るという様相は否めないですが、逆に、鹿児島県において、βレンサワクチンを接種したことにより、例年に比べ、タルダによる斃死が少なく、対象区(未接種区)との比較においてかなりの有意性を示した事例もあります。(表1)。このように、現階段で、これらの因果を全てワクチン接種に結び付けるには、非常に判断が難しいところではあります。

—期待される混合ワクチン—

最後に、昨年βレンサワクチンを接種した生産者の中で、一番多かった意見(要望)は、上記のように近年のエドワジエラタルダ症、また新しいレンサ球菌症による被害が非常に大きい為に、それに対するワクチン(混合)の研究、開発を要望されるものでした。昨年、海外からの輸入魚による薬剤残留の問題もありました。消費者の安心・安全志向は相変わらず高く、それに対する生産者の対応(取組み)は、もはや消費者から見た場合、当たり前の様相になってきました。昨年、初めてヒラメのワクチンが発売されましたが、今後も、更なるワクチン研究、開発による病気抑制、経済効果の向上を可能にしたいと考えます。

【表1】

鹿児島県A水産 2005年4月26日接種分
データ収集期間: 2005年7月1日~10月31日
尾数: 接種区5,650尾、未接種区5,200尾

斃死数		歩留まり		
	ワクチン区	未接種区	ワクチン区	未接種区
7月	30	316	99.5%	93.9%
8月	19	224	99.1%	89.6%
9月	35	339	98.5%	83.1%
10月	60	644	97.5%	70.7%
累計	144	1523	97.5%	70.7%

※同じ生産者で、接種日が違います
※βレンサの発生は接種区、未接種区ともにありませんでした。
※斃死原因のほとんどが、タルダ、滑走細菌でした。

鹿児島県A水産 2005年4月22日接種分
データ収集期間: 2005年7月1日~10月31日
尾数: 接種区6,060尾

斃死数		歩留まり		
	ワクチン区	未接種区	ワクチン区	未接種区
7月	11	5	99.8%	99.9%
8月	5	39	99.7%	99.3%
9月	5	54	99.7%	98.4%
10月	35	161	99.1%	95.7%
累計	56	259	99.1%	95.7%

「西日本トラフグ陸上養殖協議会」が発足

九州地区でトラフグの陸上養殖を行う養魚家による「西日本トラフグ陸上養殖協議会」が2005年10月1日に発足した。陸上でのトラフグ養殖事業を経営的にも持続的なものとするべく、技術交流や情報交換を密に行っていくのが趣意。会員企業は、天草海龍観光(株)、海洋牧場、(有)佐々木水産、(有)村田活魚(以上4社は熊本県)、(有)松永水産、(有)峯養魚場(以上2社は長崎県)、(有)キョーヨー活魚(佐賀県)の養殖企業と養殖資材関連の太平洋貿易(株)、東洋化成(株)の9社。初代会長には松永氏(有)松永水産が、副会長には太田氏(天草海龍観光(株))がそれぞれ就任し、太平洋貿易(株)が事務局を務める。

「メンバー間の技術交流は5~6年前から行われているが、組織化によってさらに綿密な交流ができ、お互いのスキルアップや採算性向上にもつながると考えた。養殖技術の研鑽のみならず、マーケット情報交換を密にし、親魚養成、育種にも挑戦し、協議会企業ならではの高品質フグを差別化商品として定着させたい」と松永会長。今後は年3回程度の定例会と国内外の研修旅行をする予定だ。ちなみに、会員企業トラフグの今期の予定出荷量はキロ物で約20万尾。

生産(利水)方式は、峯養魚場が半閉鎖循環方式、他は掛け流し式。

アユ養殖再生への試練

- ・アユの消費は引き続き減少傾向にある。

■平成16年度のアユ養殖

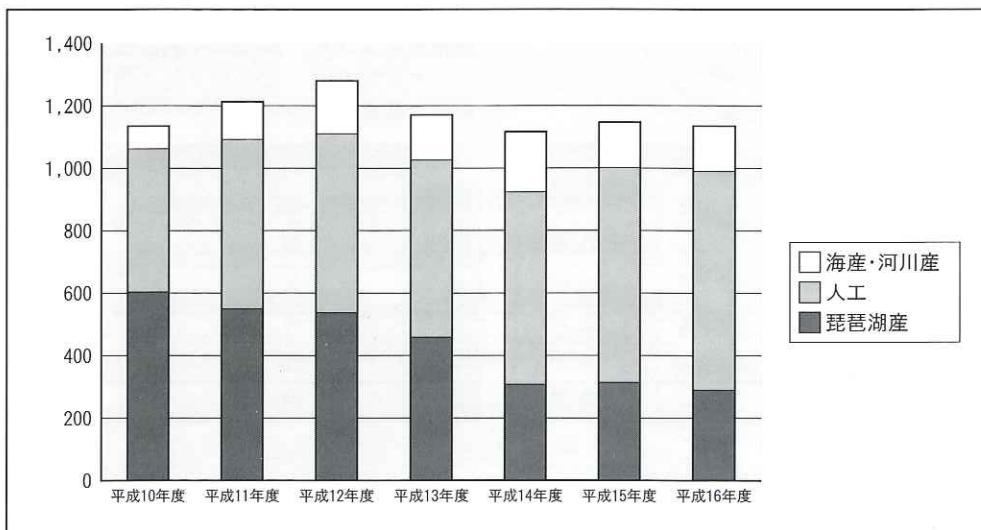
河川放流量は引き続き減少(1,147㌧; 前年対比△4.2%)となったが、養殖生産量(7,209㌧; 前年比3.6%増)は人工種苗導入増により増加した。しかし、河川放流市場の減少や冷凍アユ市場の減少、さらに中国産養殖アユの定着など問題点が多い年となった。

■平成17年度、主産地での休廃業が加速

琵琶湖産種苗の歴史的な不良、市場価格の安値安定等により徳島・和歌山での休廃業続出で締めくくる年となった。市場出荷での事実上のオリンピック

方式による価格形成が採算悪化させている。すなわち、いち早く市場への出荷を行った業者(歩留まりの良い業者)が、その年の生産物価格を形成し、それに乗り遅れた業者(歩留まりの悪い業者)は、休廃業を迫られる状態にある。この状態を改善するには、季節感のある出荷を行うなど市場ニーズの再認識が必要と思われる。

河川放流においては、琵琶湖産種苗の不足から人工種苗や海産・湖産種苗シェアを伸ばした。また、人工種苗を生産する団体の有志による研究会の実施や岐阜県のある漁協が実施している放流魚の釣果低下対策として従来の解禁前での一括放流から分割放流へと方式を改め、改善効果出てきている。



グレートソルトレークの現況

浅田 雅宏
(太平洋貿易株式会社)

アルテミア耐久卵の最大産地である米国ユタ州グレートソルトレイク（以下、GSL）の複数の採取業者などから収集した情報によれば、今期は前年以上の収穫量が期待できそうな一方で、品質については現地でも見方が分かれているようです。

■親アルテミアの生育環境は良好

DWR（ユタ州野生動物資源管理部門）発表による2005年12月6日までの収穫量は、前年同時期と比べ「やや増」といったところです。湖水1ℓあたりの浮遊シスト（卵）数は前年より少ないものの、“一時禁漁”を要するレベルとは思えませんし、前年上昇した湖水の塩分濃度も下がり、天候も比較的安定しているので、収穫量は今後さらに増え、シーズン一貫でも前年を上回ると予想されています。一方、品質については、例年同様、「現時点ではまだ判らない」というべきでしょう。

ちなみに、前シーズン（04年10月～05年2月）は夏場の小雨で湖水の塩分濃度が親アルテミアの生存限界近くまで上昇し、それに伴う不漁と品質低下（湖水の浮力が増すことで湖底の古い耐久卵が浮上し、新しい耐久卵と混ざる）が懸念されながらのシーズンでした。また、12月以降は荒天が多く、さらに上記予想などから最大手の採取業者が操業を見合させました。結果は、シーズン末までの収穫量では03年シーズン（03年10月～04年2月）を上回ったものの、漁期後半の収穫分についてはやはり品質低下が見られました。しかし、10月1日の解禁から約10日間の収穫量は03年を上回り、しかも高品質でした。このため、日本へ輸出された製品についても、供給元（採取業者）による品質差が大きいようです。

■現時点での品質評価は尚早

05年産の耐久卵の品質については、現地関係者間で「良い」とする向きと「悪い」とする向きとがあ

り、前者は「前年と比べ、湖水の環境条件が良くなつた」ということ、後者は「昨冬の荒天から雪解け水の流入量が多く、湖底の古い卵を巻き上げた」ということが根拠となっているようです。また、こうした科学的（？）な分析以外に、自社の在庫量（十分ある場合もない場合も）を背景とした経済的・恣意的発言も聞こえてきますが、本当のところは、“休眠期間後の最終製品”でのふ化試験を待たないと、つまり2月頃までは判らないと思います。個人的には「総量が増えるのであれば良品も多少は増えるだろう」と踏んでいますが、「ではその良品のレベル（ふ化率）は“04年の初期物”と比べてどうか？」と問われれば、その判断材料はなく、答えに窮します。

■採取業者間の価格協定強化？

GSLでの今期の操業状況をみると、大手業者は所有するライセンスの半分程度しか使っておらず、小規模業者のなかには操業を見合せたところもあるようです。わずか数年前には、高単価を当て込んだ多数の採取業者がゴールドラッシュのごとくひしめき合って操業していたわけですが、その結果、耐久卵の市場価格は彼らの不採算ライン近くまで下落しました。そのため以後は“採取努力量”がセーブされるとともに、採取業者間の価格協定を強化しようとする動きも出てきているようです。けれども、採取業者それぞれのポジション（在庫の多寡など）があることから、どこかの国の「構造改革」と同様、総論賛成・各論反対となるのは必至で、実現するとしても2～3年はかかるでしょう。実際、この件についての各業者の発言内容はまちまちです。

<備考：本文は湊文社発行アクアネット2006年1月号68ページに掲載されています。>

〔新商品紹介〕

ノーサン 二枚貝種苗育成用飼料

Nosan Shellfish Micron

M-1

種苗生産に

“M-1”はキートセラスなど微細藻類の代替品として、アコヤ貝などの二枚貝類の種苗生産にご使用いただけます。

食用貝の肥育・養殖に

“M-1”はハマグリ、アサリで良好な肥育効果を実証しており、食味も良くする効果があります。

ほとんどの二枚貝が捕食できる微粒子飼料

“M-1”は、多くの二枚貝類が捕食できる微粒子サイズに仕上がっています。

優れた栄養性能

“M-1”は外部研究機関との共同研究も行い、摂飢性と成長性に優れる原料をバランス良く組み合わせて開発した飼料です。

給与方法（例）

- ① “M-1”の必要量を秤量する。
- ②家庭用ミキサーに真水（水道水可）を500mlほど入れて“M-1”を加える。10~20秒程度攪拌し、飼料懸濁液とする（ミキサーがない場合は泡立て器などでよく攪拌する）。
- ③飼料懸濁液を飼育水槽に万遍なく散布する。
- ④給餌は1日数回行う（間欠給与で効果がある）。貝総重量の0.4~0.6%/日（アコヤガイ種苗・ハマグリ・アサリ）を目安に、残餌をチェックしながら給与する。

製品規格（入目）

形状	平均粒径	入目	包装
微粒子 飼料	15μ	5kg段ボール箱	正味重量5kg 1kg×5袋（アルミ包装）



海産微細藻類

甲殻類・二枚貝の生物飼料として世界中で好評いただいている海産微細藻類（米国産7種類）の商品規格とアメリカおよびヨーロッパでの使用例

商品規格

海産微細藻類名	細胞濃度 (Cell/ml)	乾重量 (%)	平均サイズ (μ)
テトラセルミス	15億	18.9	12
イソクリシス	46億	9	5~6
バブロバ	33億	9	4~7
タラシオシラ (W)	3.2億	9	16
タラシオシラ (3H)	107億	9	4
Mix微細藻類	※		

※Mix微細藻類（テトラセルミス20%、イソクリシス20%、バブロバ35%、タラシオシラW25%）

※商品は1ℓより販売いたします。なお、本商品は米国フロリダより取り寄せのため、商品の在庫がない場合納品まで10日間かかります

濃縮浮遊珪藻

種苗生産の省力化・集約化にお役に立てばと、田崎真珠株が長年の実績・研究で得た特に優秀なキートセラス2種（カリストラヌス、グラシリス）を独自の細胞を壊さず生きたままの濃縮方法で製品化しました。

商品規格

種類	細胞濃度 (Cell/ml)	平均サイズ (μ)	容量
キートセロス・カリストラヌス	5億	3.5~5.5	1ℓ/本、0.5ℓ/本、0.1ℓ/本
キートセロス・グラシリス	4億	5.5~7.5	1ℓ/本、0.5ℓ/本、0.1ℓ/本

※クール宅急便にてお届けいたします。



〒838-0115 福岡県小郡市大保1017-5
TEL: 0942-75-7445 FAX: 0492-75-7445
携帯TEL: 090-7471-8622 (担当:重野)

観賞魚・水族館・実験用に…

「生クロレラV12」「スーパー生クロレラV12」1L販売



生クロレラV12(1L):ワムシ・ミジンコ等の安定生産を可能にする培養用淡水濃縮生クロレラ餌料です。



スーパー生クロレラV12(1L):クロレラにEPA・DHA等の油を生体濃縮させたワムシ・ミジンコ等の安定生産栄養強化クロレラです。

クロレラ工業株式会社 生産本部 技術特販部
福岡県筑後市久富1343(〒833-0056) ☎0120-39-9603
E-mail:gijutsutokuhan@chlorella.co.jp

 **クロレラ工業株式会社**

東京都港区芝大門2-4-6 <http://www.chlorella.co.jp/>

〔新入会案内〕

④中部飼料株式会社 水産部

あけましておめでとうございます。平素より格別のお引き立てにあずかり、厚く御礼申し上げます。

このたび、NPO法人アクアカルチャーネットワークに入会いたしました。

中部飼料株式会社は、皆様方へより良い商品を提供するため、日々研究・開発に取り組んでおります。この入会を機会に皆様からのご意見、ご要望を広く聞かせていただき、微力ながら水産業界の更なる発展に力を尽くさせていただく所存でございます。

これからも倍旧のご指導を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

平成18年1月

中部飼料株式会社
取締役水産部長 北川 博

中 部 飼 料 株 式 会 社 水産部 水産本部

〒478-8502 愛知県知多市北浜町14番地6
TEL0562-33-2107 FAX0562-33-1102

今年も、つくり育てる漁業のより一層のご発展をお祈りいたします。

平成18年 新春

NPO法人 **ACN**
(アクアカルチャーネットワーク)

つくり育てる漁業・人と技術のネットワーク

有限会社アイエスシー
上野製薬株式会社
クロレラ工業株式会社
コフロック株式会社
株式会社サン・ダイコー
有限会社西和マリンプロダクツ
太平洋貿易株式会社
株式会社田中三次郎商店
中部飼料株式会社
日清丸紅飼料株式会社
林兼産業株式会社
バッセル化学株式会社
有限会社松阪製作所
株式会社山一製作所
ヤンマー株式会社

(団体正会員)

【お知らせ】

今回別紙にて、「第6回ACNとの懇話会」に於けるアンケートを行い、皆様の率直な意見を伺いながらこの会を成功させたいと考えております。御協力をお願い申し上げます。

FAX返信先 NPO法人ACN事務局

クロレラ工業株式会社 特販部 藤木 宛 (FAX0942-51-7203)